

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02131

研究課題名（和文）相互行為における行為の構成 原発避難地域における日常活動の基盤

研究課題名（英文）Action Construction in Interaction

研究代表者

西阪 仰（Nishizaka, Aug）

千葉大学・大学院人文科学研究院・名誉教授

研究者番号：80208173

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、知識や権利義務の非対称的配分を参加者自身がどう管理しながら、自分らの行為をどう管理するのか、および、知識や知覚を互いに帰属し合いながら、参加者たちはいかに行為を成し遂げているのか、という2つの間に答えることである。そのために、会話分析の方法を用いた。本研究の研究成果は、次の3点にまとめられる。1) 知覚は環境に関する情報を収集するだけでなく、行為の意味を構成すること。2) 細かく見ることは、特定の行為のための、より詳細な情報を収集するだけでなく、特定行為の意味を構成すること。3) 参加者たちは、提案や同意を管理するために、自分たちの間の仕切りを維持・変更すること。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言葉の使用が単に情報の伝達であるだけでなく、特定の行為タイプを構成することは、よく知られている。その一方、知覚も、単に特定行為遂行のために情報を収集するだけでなく、特定の行為タイプを構成する。このことを初めて明確に示した本研究の学術的意義は大きい。

本研究は、おもなデータとして、2011年3月の福島第一原発の爆発事故の直後、地域全体で避難し、その後地域に戻ってきた当該地域の住民の活動をビデオに収めたものを用いた。未曾有と呼ばれた事故から10年経ったなかでの地域住民の日常生活の一端を提示できたこと、このことの社会的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to address the following questions: How do participants manage their action formations through the management of the distribution of knowledge and perception and the distribution of rights and obligations, and how do participants accomplish their actions through their mutual attribution of knowledge and perception? This project employed conversation analysis as the methodology to answer these questions.

We obtained the following three findings: (1) Perceiving is not only collecting information from the environment but is also constitutive of the meaning of an action, (2) seeing details of an object is not only collecting more precise information to perform a specific action but is also constitutive of the meaning of an action, and (3) to manage the formation of actions such as proposal and its acceptance, participants maintain or change the partitioning of the relevant population.

研究分野：社会学

キーワード：行為 知識 知覚 権利と義務 関連集団の仕切り 会話分析

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始時期には、相互行為研究において、知識や権利義務の相互行為参加者間での配分と相互行為における行為の構成との関係が、盛んに論じられていた。例えば、「(あなたは)離婚しているんだ」という発話は、質問でなく陳述の形式をとっている。しかし、それは、発話の宛てられている者(「あなた」)に所属する事柄に関する陳述であるため、その形式にもかかわらず、質問(確認の求め)という行為を構成する。すなわち、どのタイプの行為が構成されるかは、文法形式ではなく、むしろ、知識の非対称的配分(言及されている事態について話し手と受け手のどちらがよく知っているか)に依存する。一方、参加者の知識や権利義務の配分は、いつもその多寡が比較可能であるとはかぎらない。そこで、共約不可能な(単純な比較が不可能な)知識の配分、あるいは知識と共約不可能な認知(とくに知覚)の帰属が、行為の構成とどのような関係にあるのか、という問が得られた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、とくに以下の2つの問に答えることである。(1) 知識や権利義務の非対称的な配分を参加者自身がどのように管理し、それにもとづいて、提案や主張という行為をどう管理するのか。(2) 知識や知識に還元できない知覚を、互いに帰属し合いながら参加者たちは、いかに行為を成し遂げているのか。

3. 研究の方法

(1) 方法: 上の2つの問に答えるために、会話分析の方法を用いた。会話分析は、(実験的に設定されたのではない)自然になされる相互行為において、参加者が自分たちの行為・知識・知覚・権利義務についてどのような把握を持っているかを、相互行為において出来る細かなことから(わずかな沈黙や発言の重なりなどのタイミング、視線の動きやわずかな身体の動きなど)に根拠つけて明らかにする方法的態度である。参加者たちの知識の配分や、参加者たちが何をどう知覚しているかなどについて、分析者がそれを想定するのではなく、あくまでも相互行為の詳細に根拠づけようというものである。

(2) データ: データは、おもに2011年の福島県における原発事故ののち、避難から帰還した地域住民による(子どもたちのための)活動のビデオ収録を用いた。このビデオは、本研究の研究チームが、本研究以前より集めたものである。本研究では、新型コロナウイルス感染症の影響で、新たなデータ収集は思うように進まなかった。また、国立国語研究所による「日本語日常会話コーパス(CEJC)」(小磯他, 2020)も積極的に活用した。

4. 研究成果

本研究の研究成果は、次の3つにまとめることができる。(1) 知覚は行為の環境に関する情報を収集するだけでなく、行為の意味を構成すること、(2) 関連して、細かく見ることは、特定の行為のための、より詳細な情報を収集するだけでなく、特定行為の意味を構成すること、(3) 参加者たちは、提案や同意を管理するために、自分たちの間の仕切りを維持・変更すること、この3点である。順次、この間発表された論文に依拠しながら具体的に述べていく。

(1) 知覚と行為の意味

J. L. オースティンは、言葉は情報の伝達だけに用いられるのではなく、言葉を用いることが、すなわち行為を遂行することにほかならないこと、このことを看破した。同じことが、知覚についても言える(にもかかわらず、このことを明確に示したのは、本研究がおそらく最初である)。すなわち、知覚は、特定行為の遂行のための情報を行為の環境より得るだけでなく、行為の意味(行為タイプ)の構成成分でもある。

次の事例は、子どもが川で捕った魚に、大人2人が串を通してところである。阿部は、船田(社長と呼ばれている)に対して、皮を通さない(図1の右側)ほうが串を刺しやすいことを伝えている。

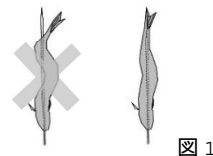


図1

事例1 (福島データ: Nishizaka, 2021a より) 抜書で用いられている記号は、末尾の付録を参照。

01 阿部: 社長 それ なかから |こう (x)入れてっ|た ほうが

阿部: -->> 船田を見る ----->>

阿部: |右手人差し指をくねらせる(図2)

船田: |阿部を見る



図2

02 阿部: はやいっす |よ

船田: |手に持った魚を見る

03 船田: あ |そうですか やっ「ぱり s-

04 阿部: | 「皮 やっ「ぱ 刺さんない.

阿部: |船田の手を見る |船田の魚を指さす(図3)

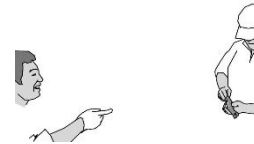


図 3

05 船田: 皮 刺ささんないですよ?

01~02 行目で、阿部は、串の刺し方を手で示す。図2からわかるように、この手振りが船田に見えるように、手を船田のほうに掲げている。船田は、それに対して、「あ そうですか」(03 行目)と、それをいわば情報として受け止め、刺し方を変えることなく、作業を続けている。それを見ている阿部は、今度は(04 行目)、船田の手に握られた魚を指さしながらそこに視線を固定し、「皮が刺さらない」ことを再度伝える。04 行目の阿部の発言は、03 行目の船田の反応を受けて、01~02 行目の発言を「やり直し」たものと聞くことができる。すなわち、船田が 01~02 行目の阿部の発言を、串刺しのやり方に関する情報の提示として受け取ったのに対して、阿部は、むしろ、自らの発言を、単なる情報提示以上のなものかとして構成しようとしている。(紙幅の都合上詳細は省略するが)05 行目で船田が、再び阿部の発言を情報として受け止めたあと、さらに阿部は、より早くできる刺し方を(図2と近似の手振りを用いて)示す。阿部の一連の発言は、むしろ、刺し方の「教示」として構成されている。実際、最終的に船田は、阿部の教示に従ったやり方で、串刺しを試みる。

阿部の一連の発言のなかで特徴的なのは、最初の(教示の構成の)「失敗」を受けて、「やり直し」を試みるときの、それに付随する身体的振舞いである。阿部は、指さしと視線により、自身の発言を、船田の現在進行中の作業に知覚的にいわば「係留」している(図3)。つまり、現在進行中の作業を知覚していることが、発言と結びつけられることで、その発言は、単なる情報伝達を超えて「教示」として構成されているように見える。

阿部の「(指さしながら)あえてしっかり見ること」を、船田にそれとわかるようにすることは、それにより新たな情報を環境から得ようとしているようには見えない。ここでは、「見ること」が行為の構成成分となっている。

(2) 見ることの粒度と行為の意味

相互行為の参加者は、あえて「細かく見ること」を行なうことが、すなわち見ることの粒度を上げることがある。例えば、同じ語句を繰り返すことで、相手の現在進行中の作業を間断なく詳細に見続けていることを行なうこともある(Nishizaka, 2022)。あるいは、ある対象に顔をあえて近づけるといふ振舞い、すなわち「吟味すること」を行なうこともある(Nishizaka, 2023)。細かく見ることは、必ずしもより詳細な情報を得ることを意味するわけではない。相手の前で細かく見ることは、なによりも、いまあえて細かく見ていることを、相手に伝えている。そのことにより、細かく見ることは、行為の意味の一部となることができる。

事例2は、川内が、自分の制作したアクセサリーを、杉田の店で委託販売するにあたり、委託料の支払い方法について相談している場面である。この事例の直前に、杉田は、委託料を定額で払うか、売り上げの一部として払うかという選択肢を提示していた。

事例2(日常会話コーパス: K002 004: Nishizaka, 2023 より)

01 川内: ええ::と ちょっと安めの設定::::[: :: : に し]てるん」で=

02 杉田: [んん んん んん んん]

03 川内: =す↑ね

04 杉田: そうでしょうね [ず- すごい- .hh ↑例えば: これ[全部じゃあ書き=

05 川内: [ん::ん [ん

06 杉田: =換えてもらうこととかできます?=[いま .hh

07 川内: [あ 全然 [それは:: (.) できます:]

08 杉田: [あの:: ここに>例えば<二]七

09 六百元にすると[か?

10 川内: [はい:

11 川内: は::[い

12 杉田: [そんな[形: での:]

13 川内: [それはでき]ます:

14 (1.2)

15 杉田: やりましようか

01~03 行目で川内は、自分の作品に触れながら、値段を安めに設定していると伝える。この発言は、この文脈でなされるとき、委託料分を値段に上乗せする方向を示唆しているように聞こえる。実際、04 行目で杉田は、値段の安さが自分でも見てとれることを主張したあと(「そうでし

ようね」, 値札を指さしながら, 値札上の値段をいま書き換えることができるか, 尋ねている (04~06 行目). この杉田の発言は, この文脈においてその発言だけを聞くなれば, 値段を書き換えることの提案にも聞こえる. しかし, 川内は, 07 行目で, 対照標識「は」「それは」とともに「できます」とだけ答え, あたかもそれはできるけれども, できないこともあるかのような答えを産出する. これは, 01~02 行目で川内自身が示唆していることと一致しない. それだけでなく, この消極的な含意は, 「全然」という強調とも不釣り合いである. ここでは, 川内は, 杉田の問を「提案」としてではなく, むしろ, 単なる「可能性・能力についての質問」として扱っているように見える. じつは, 杉田の身体的振舞いを考慮するならば, 杉田の問自体が, そのような質問として組み立てられるのがわかる. 次の抜書は, 事例 2 の 04~06 行目の詳細な書取りである.

事例 2 (04~06 行目詳細)

- 04 杉田: そうでしょうね 「ず- すごい- | .hh | ↑例え|ば: これ「全部じゃあ書き=
- 05 川内: 「ん::ん | | | 「ん
- 杉田: |上体をテーブルの上に前に曲げながら,
左手をタグに向かって伸ばし, タグに
指先で触れる|
- 川内: |テーブルの上に伸ばしていた左手
を引っ込める
- 川内: |杉田が触れている先を
見ながら, 後ろに下がる
- 06 杉田: 変|えてもらうこととができます?=[いま .hh
- 杉田: |指先で, 別のタグに触れる (図 4)



図 4

杉田は, 04~06 行目の問とともに, 上体を商品が置かれている机に向かって折り曲げ, 指で値札に触れる (図 4). いわば値札の細かなところを「吟味すること」により, 同時に産出されている問は, その値札の細かなところが, 川内の書換えを許容するかの問として構成される. 杉田の「詳細に見ること」は, 単に環境から細かな情報を集めるためになされるだけでなく, まさに細かな情報を集めていることを相手に見せるようデザインされている. それにより, 同時進行の発言は, その情報 (杉田に帰属される知覚の経験) と関連づけられ, 特定の行為として構成される. 見ることは, ここでも, 行為の構成成分となっている.

細かく見ることは, より正確に見ることではない. ヴィトゲンシュタインが見抜いたように, 天文学者にとっては 1 メートルは, もはや細かすぎて意味をなさないのに対して, 指物師にとっては, 1 ミリメートルですら大雑把すぎる. 細かさと正確さは, いわば異なる言語ゲームに属する. 言い換えれば, 見ることの適切な粒度が, まさにその粒度が正確になるような, そういう特定行為の構成成分なのである.

(3) 関連集団の仕切り

知識や権利義務の配分の管理は, 「提案」やそれに対する「同意」の管理と密接に結びついている. 知識や権利義務の配分は, その人がそもそも「何者」としてその相互行為に参加しているのかと関係している. 例えば, 提案や同意において, 行為者は, つねに何者かとしての立場より, その提案や同意を行なっている. 次の事例は, 地域住民らが子どものための企画を話し合う場面である. 林業従事者で, ツリークライミング (木登り体験 TC) の専門家でもある住民 (木戸) が, 子どもに TC を体験させる企画の可能性について語ったあと, 事例 3 のやりとりが続く. 木戸は, 「どうですか」と明確に意見を求めていた. それに対して, 他の住民 (遠藤) が, 意見を述べ, 15 行目で「ぜひほんと」と「依頼」の形で木戸の提案を受け入れる.

事例 3 (福島データ: Nishizaka, 2021b より; 秋津は地域における支援者)

- 01 遠藤: [まあ みんなこれ こども- こど-子育て: 世代:[:
- 02 秋津: 「ん::ん
- 03 遠藤: だし:
- 04 (0.2)
- 05 遠藤: .t そうゆう部分で? ぜひ そうゆうツリークライミング
- 06 なんか [も:
- 07 秋津: [んん んん
- 08 遠藤: ね:? やってもらいながら::?
- 09 ((5 行省略))
- 10 遠藤: 将来? .h (1.0) こう xx((地域名))に: (.) このまずっと住んでよう:
- 11 ってゆう:::-: のをね? お-:[思ってもらえれば↑な:: ってゆう=
- 12 秋津: [ん
- 13 遠藤: =部分も青年部-
- 14 秋津: んん

遠藤は、01 行目で「子育て世代」という表現を導入することにより、関連する集団を分割する 1 つの軸を導入する。つまり、「子どもを育てている」者とそうでない者に、関連集団は分割される。また、08 行目で、「もらう」という受益関係を表わす言い方を導入することで、「子育て世代」に分類された人たちを同時に、TC の専門家でない者として分類する。さらに、13~15 行目で（商工会議所）「青年部の活動」に言及することで、もう 1 つの分割軸を導入する。これらは、専門家に TC の企画をしてもらう者たちと TC の企画者との間に、一貫した形で仕切りを入れる。これにより、受益・供益の関係と（TC に関する）専門知識の配分の非対称性を一致させることで、同意のための強力な根拠が提示される。

一方、同意のために、関連集団にどのような仕切りを入れるかは、参加者の固定的な「何者性」によって予め決まっているわけではない。同意される側が提起した仕切りが、同意する側によって変更されることもある。次の事例では、すでに子育て世代を脱している佐々木が、子育て世代の竹内に、炭に関する子ども知識について同意を求めているところである。

事例 4 (福島データ: Nishizaka, 2021b より) [KC: Jan 21, 2017: 00:42]

- 01 佐々木: だから その 子どもたちに:~ そうゆう
 02 竹 内: んん ん
 03 佐々木: すみだつてえの .h だ[いたい なにに使うか::~ ぐらい[::-:=
 04 秋 津: [やった[() [ehhh
 05 竹 内: [わかってないね:: んん: ん
 06 佐々木: =[ん' ところも はな[し わかんないでしょ。
 07 竹 内: [そもそも- とまか[く
 08 秋 津: [火は使
 09 [わないですからね\$
 10 竹 内: [そもそもどうやって作っかもわかんねえばい?

03 行目と 06 行目で、佐々木は、竹内のほうを向いて、子どもが炭の使い方を知らないことについて、同意を求めている。「でしょ」という言い方は、自分も推測はできているけれども、相手のほうが確たる証拠を持っているはずだという言い方であるように感じる。それにより、佐々木は、竹内を「現在の子どもの親」と分類し、それにより、佐々木自身と竹内の間に仕切りを設定している。ここでは、子どもに関する知識の非対称性により「確認」が同意として与えられるはずだった。一方、10 行目で、竹内は、子どもは使い方だけでなく、作り方も知らないということについて、「ばい」という表現によって、確認を求めている（ちょうど「ばい」という、確認を求める表現が発せられるところで、竹内は、秋津に向けていた視線を、佐々木に向ける。つまり、その確認は、佐々木に対して求められているように見える）。

この竹内の発言は 2 つの点で際立っている。第 1 に、竹内は、佐々木に確認を求めることにより、竹内が子どもの炭に関する知識について、佐々木よりとくに知っているわけではないことを提起する。つまり、佐々木が前提としていた知識の非対称性を否定している。第 2 に、佐々木が「炭の使い方」という、家庭において経験できることについて確認を求めているのに対して、竹内は、「炭の作り方」という家庭とは無関係な、炭の生産の知識について確認を求めている。これにより、竹内は、自身と佐々木を、子どもではない、いわば「大人」としてともに分類されるよう、関連集団の仕切りを組み替えている。

同意を求められたとき、何にどのように同意するかは、じつは単純ではない。おそらく現在、そもそも家庭で炭を使わなければ、それについて竹内は、佐々木に対して、とりたてて確認を与えることのできる立場にないかもしれない。同意できることに同意するために、関連集団の仕切りを組み替える。つまり、同意の管理は、集団分割の管理と密接に関係している。

<引用文献>

- 小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子他, 2020. 『『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析』国立国語研究所論集 18:7-33.
 Nishizaka, Aug. 2021a. Seeing and knowing in interaction. *Discourse Studies*, 23(6): 759-777.
 Nishizaka, Aug. 2021b. Partitioning a population in agreement and disagreement. *Journal of Pragmatics*, 172: 225-238.
 Nishizaka, Aug. 2023. Doing inspecting in interaction. *Mind, Culture, and Activity*, 30(2): 169-187.

<付録: 抜書の記号>

音声部分の書き写しについては、<https://www.augnishizaka.com/transsym.htm> を参照。各行の下に身体的振舞いが書き取られている。その開始位置は|で示され、次の行にわたる継続は二重矢印(->>)で示される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Nishizaka Aug	4. 巻 226
2. 論文標題 Experiencing space: Some uses of Japanese proximal spatial deictic expressions	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 34 ~ 50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2024.04.003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nishizaka Aug	4. 巻 30
2. 論文標題 Doing inspecting in interaction: seeing the physiognomy of an object	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Mind, Culture, and Activity	6. 最初と最後の頁 169 ~ 187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/10749039.2023.2246450	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒嶋 智美	4. 巻 1
2. 論文標題 行為連鎖組織	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック』（新曜社）	6. 最初と最後の頁 173 ~ 188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮友根	4. 巻 1
2. 論文標題 実践の論理を描く	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践の論理を描く（小宮友根・黒嶋智美編）	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早野 薫	4. 巻 1
2. 論文標題 質問に対する2つ(以上)の応答	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践の論理を描く(小宮友根・黒嶋智美編)	6. 最初と最後の頁 24-40
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒嶋智美	4. 巻 1
2. 論文標題 合意形成における経験, 知識, 権利	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践の論理を描く(小宮友根・黒嶋智美編)	6. 最初と最後の頁 59-76
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮友根	4. 巻 1
2. 論文標題 再現身体と仮想身体	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践の論理を描く(小宮友根・黒嶋智美編)	6. 最初と最後の頁 140-157
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須永将史	4. 巻 1
2. 論文標題 計画はいかにして修正されるのか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践の論理を描く(小宮友根・黒嶋智美編)	6. 最初と最後の頁 95-113
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒嶋智美	4. 巻 1
2. 論文標題 同定・観察・確認作業の構成における「見ること」の相互行為的基盤	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 外界と対峙する（伝康晴・前川喜久雄・坂井田瑠衣監修）	6. 最初と最後の頁 150-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nishizaka Aug	4. 巻 23
2. 論文標題 Seeing and knowing in interaction: Two distinct resources for action construction	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Discourse Studies	6. 最初と最後の頁 759 ~ 777
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/14614456211017712	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kuroshima Satomi、Ivarsson Jonas	4. 巻 4
2. 論文標題 Toward a praxeological account of performing surgery	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Social Interaction. Video-Based Studies of Human Sociality	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7146/si.v4i3.128146	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nishizaka Aug	4. 巻 172
2. 論文標題 Partitioning a population in agreement and disagreement	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 225 ~ 238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.pragma.2020.11.015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nishizaka Aug	4. 巻 3
2. 論文標題 Multi-Sensory Perception during Palpation in Japanese Midwifery Practice	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Social Interaction. Video-Based Studies of Human Sociality	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7146/si.v3i1.120256	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kuroshima Satomi	4. 巻 3
2. 論文標題 Therapist and patient accountability through tactility and sensation in medical massage sessions	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Social Interaction. Video-Based Studies of Human Sociality	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7146/si.v3i1.120251	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒嶋智美	4. 巻 31
2. 論文標題 医療記録を「読むこと」と「見ること」の会話分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本保健医療社会学会論集	6. 最初と最後の頁 67-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18918/jshms.31.2_67	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須永 将史	4. 巻 23
2. 論文標題 質問のデザインにおける痛みの理解可能性 在宅マッサージの相互行為分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 194 ~ 209
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19024/jajls.23.1_194	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 The temporal thickness of the lifeworld
3. 学会等名 The Japan-Singapore Joint Ethnomethodology and Conversation Analysis Symposium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Aug Nishizaka, Kaoru Hayano
2. 発表標題 Targeting in interaction: Second-order turn allocation and double accountabilities of action
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Minato Suzuki, Aug Nishizaka
2. 発表標題 Seeing What One Senses: Aspects of Multimodal Perception
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 Experiencing space: Two uses of Japanese proximal spatial deictic expressions
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima
2. 発表標題 Perception-based deontically congruent action formation for transferring objects in surgical operations
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masato Komuro, Kaoru Hayano
2. 発表標題 Memory and perception as bases for identifying an object
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima
2. 発表標題 Invoking the third-person perspective: Distribution of deontic responsibilities in the construction of an assertion
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Aug Nishizaka, Masafumi Sunaga, Kotaro Sambe
2. 発表標題 Ideas Distributed among Multiple Voices: Discussions in Protests against the Construction of Narita International Airport
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 Seeing and touching in interaction: Doing "inspecting" and action construction
3. 学会等名 The importance of touch during the time of covid: An international symposium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 Experiencing Space: Two Uses of Japanese Proximal Spatial Deictic Expressions
3. 学会等名 The Centre for Advanced Studies in Language & Communication (the University of York) (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima
2. 発表標題 Invoking shared knowledge in proposal sequences for collaborative activities
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nishizaka, Aug
2. 発表標題 The Ascribability of Action in Interaction: Revisiting the Status/Stance Distinction
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kuroshima, Satomi; Komiya, Tomone
2. 発表標題 Cross-Cutting Preference of the Evaluation of Radioactive Dose: Local Epistemology and Moral Accountability
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

西阪仰研究室 http://www.augnishizaka.com/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	早野 薫 (Hayano Kaoru) (20647143)	日本女子大学・文学部・准教授 (32670)	
研究分担者	小宮 友根 (Komiya Tomone) (40714001)	東北学院大学・経済学部・准教授 (31302)	
研究分担者	黒嶋 智美 (Kuroshima Satomi) (50714002)	玉川大学・ELFセンター・准教授 (32639)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	須永 将史 (Sunaga Masafumi) (90783457)	小樽商科大学・商学部・准教授 (10104)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小室 允人 (Komuro Masato)		
研究協力者	鈴木 南音 (Suzuki Minato)		
連携研究者	岩田 夏穂 (Iwata Natsuho) (70536656)	武蔵野大学・グローバル学部・教授 (32680)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 Advanced Methods in Conversation Analysis and Multimodality	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 A One-Day Workshop on EMCA and Politics: How to Think and Act Politically in EMCA without Doing Politics?	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 Body, Perception, Sensoriality and the Accountability of Action Workshop	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関